

第 62 回(2012. 1. 3 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座－「中東・アラブ社会 (10)」

食費がかさみ身体が太ってくる(断食)

イスラム教徒が守る戒律のなかで最もきつい「行」は「断食」である。「断食」のことをアラビア語で「ラマダーン」だと思っている人もいるが、「ラマダーン」とは、正確にはイスラムの暦(ヒジュラ暦)で第9番目の月を意味する言葉である。「断食の行」はアラビア語で「サウム」と呼ぶ。この月は、日の出から日没まで一切の食物を口にしてはいけない。食物だけではなく、水はもちろんのこと煙草もいけない。自分の唾液までも飲み込まないで、地面に吐き出している者もいるくらいだが、サウムはヒジュラ暦で第9月(ラマダーン)の新月の翌日から次の新月まで、およそ30日の間行われるが、ヒジュラ歴は、太陽暦とは毎年11日と少しずつのズレがあるから、ラマダーンは真夏の年に当たることもあるし、真冬になる年もある。気候の厳しい時期に当たると非常にきついのはいうまでもない。

この断食は、日の出から日没までのことで、昼間は飲み食いしない代わりに、夜は何度も起きて食事をする。当然、いきなり行っては無理で、何日か前から徐々に身体を慣らしていかなければいけないが、これでは睡眠不足になってしまい、日中は疲れて動けない。それに、断食というイメージとは逆に、夜になって必死に食べるものだから、ふだんの月よりも食費はかかるし、食べては寝て昼間はあまり働かないので、太ってしまう者が多いのは皮肉な話である。

ラマダーンの最中は、さすがにふだんは必要以上に大声で喋りまくっているアラブ人が、声のトーンを落とし、何事にもおっとり構えている人たちが、更にゆっくりとした動作になって静まりかえってしまうのも無理はないのだが、この時期は、呑気な癖に妙な所で短気なアラブ人は、腹が減っているから余計に気が短くなって、交通事故が多くなったり、喧嘩が多くなったりする。断食をしながら通常業務をこなすのがイスラム教徒の義務であるといわれているし、また、イスラム教徒は、断食をすると胃の中だけでなく、心身共に洗われるような気がするともいうから、それはそれで結構なことだが、日本人の感覚では無理というものである。

この断食の行は、病人や老人子供とか妊産婦、それに旅人や戦場の軍人などは免除される。しかし、それらの人は後日その分の埋合せをして、帳尻を合わせなくてはならないというが、そのような説明をすると、疑う者が必ず出てくる。「本当に埋合せしているのかい？」とか「うそだろう。ありえない」などとわめきだす。こういう疑問は誰も抱くもので、中国には「回回(ホイホイ)は三人寄れば回回だ。二人寄っても回回だが、独りになれば回回ではない」ということわざがある。回回(ホイホイ)とは回教徒すなわちイスラム教徒のことである。中国の回族はイスラム教徒だから、そこから日本でも昔の本などには回教徒という言葉が使われたことがあった。このことわざは、イスラム教徒が一人になると戒律は守らないという意味である。また、「戒律の厳しいサウジアラビアの女性は、他国の飛行機に乗って国境を越えると、ベールを脱ぎ酒を飲む」という言葉もある。どちらも、異教徒による断食を皮肉ったものだが、それほど厳しいというものであろう。

しかし、アラブ人たちは「イスラム教徒には断食逃れをする輩は絶対にいる筈がない。なぜなら死後アッラーの御許にはいけないのだから」と断言する。そして、この断食によって心身共に浄めることが出来たのはアッラーのおかげだ、といってお祭りをするのだが、いやはや、凄まじきものは信仰である。

《閑話》 メッカへ一人で行くのは「巡礼」と言わない

友人の多くが、イスラム教徒の巡礼も四国八十八ヵ所のお寺参りと同じようなものだと思っている。「おまえも巡礼したか」と聞くから、「イスラム教徒ではないから巡礼はしない」と言うと、なんとなくつまらなそうな顔をする。なかには軽蔑したまなざしで見られる者もいる。なんで軽蔑されるのか、全く心外である。雲竹斎はれっきとした仏教徒である。イスラム教の聖地に巡礼しなくてはいけない理由はどこにもない。

日本の巡礼はたった一人であっても菅笠に「同行二人」と墨書して、お大師様と一緒に詣でることを意味しているが、いつ詣でるかはその人の自由である。また、誰に命令されるものではない。ところが、イスラム教徒の巡礼は、一年の内「決められて日」に「集団で」聖地メッカへ詣でることを言う。これが日本人の巡礼と違う。決められた日はイスラムの暦で第12の月で、8日から10日までの間にさまざまな儀式が行われる。毎度のことながら、イスラム暦は我々が使っている太陽暦と違って純粋な太陰暦だから一年がおおよそ11日短い。だから、12の月は冬とは限らず、真夏であることもある。春と秋は、たとえ地域的にあっても、日本より短いから、極端に暑いか寒い、といった気候である。こういったことをその都度説明しないと、頭の弱いわが友人たちには理解できないから疲れる。

イスラム教徒は、必ず巡礼しなければならないわけではないが、可能な限り行うようにと、イスラムの法によって定められたものである。巡礼は決められた日に、同じイスラム教徒が集団でメッカに詣でることを正式な巡礼と呼んで、決められた日の巡礼以外の日に、個人的にカーバ神殿に参詣するのは「ウムラ」といって、単なる「カーバ詣で」である。また、各地の聖地を訪れながらメッカに向かうのが、敬虔なイスラム教徒の正式な巡礼だという人も多い。どちらにしても篤い信仰の表れであることには間違いない。だから、みんな挙ってカーバ詣でをする。

この巡礼をハッジというが、イスラム教の大切な五行の一つで、預言者ムハンマドの生誕の地サウジアラビアのメッカ市にあるカーバ神殿を訪れる。メッカ市は、サウジアラビアの紅海に近い荒れ果てた岩山に囲まれた町で、そこにカーバ神殿がある。カーバ神殿は、『旧約聖書』に出てくるアブラハム(イブラーヒム)が建設したとされている石造りの建物で、モスクの中庭の中央にある。

イスラム教徒にとってメッカへの巡礼が生涯最大の願いだから、この時期には世界中から富める者も貧しい者も関係なく、メッカへメッカへと目指し、その数は200万人とも300万人ともいわれ、郊外の空地は天幕を張って寝泊まりする巡礼者で埋め尽くされるという。メッカでの儀式は、カーバ神殿の周りをコーランの一節を唱えながら、左回りに7回まわって神殿にはめ込まれた黒い石に口づけをし、その後、近くの丘を7回行ったり来たりする。そして懺悔をして、メッカの谷に向かって小石を7回投げて、悪魔を追い払う儀式を行って終わるといいますが、この他にもまだまだたくさんの儀式があって、それを全員が揃って秩序正しく定められた順序や方法で、整然とこの儀式を行う。イスラム教徒は、二枚の白い布を纏うことになっているが、カーバ神殿にある井戸の水にこの布を浸して持ち帰る。この水は「ザムザムの聖水」といわれ、万病に効く靈験あらたかな水とされている。死ぬとき、この布にくるまれて埋葬される。

今日でこそ、飛行機の安いチャーター便やら、冷暖房完備の大型バスでのツアーなどがあるが、交通機関が発達していなかったひと頃前までは、巡礼の旅はまさに命がけであったに違いない。しかし、交通機関が発達した今でも、貧しい者も多いし、また各地の聖地を訪れながらメッカに向かうのが、敬虔なイスラム教徒の正式な巡礼だという人も多いので、銘々が寝具や鍋釜を持ってバスやトラックを連ねて旅をする団体も多い。夕方ともなれば、経由地の街はずれの広場には無数の天幕が張られ、巡礼の人々の夕食の煙が雑踏の砂埃と共に夕暮れの空を覆う。これだけの大人数で移動するから、病人や怪我人も多く、この時期は病院も忙しくなり、赤い三日月マークを付けた救急車の出勤も頻繁になって来る。巡礼をする人たちには、沿線の各町や村では最高最大のもてなしをすることが神の心になつた行為とされているが、この時期が夏にあたる年はコレラや赤痢など感染症の対策が最大の問題ともなっており、巡礼者も一般市民たちも大変な時期である。それだけに、昔は命がけの巡礼を果たして来た者は、その

出身地では英雄で、「ハッジ(女性はハッジャ)」と称することを許され、名誉ある職に就くことになる。田舎では今でも名刺に仰々しく「ハッジ某」と肩書をつけて印刷している者もいるくらいである。この儀式が終わると、「巡礼明けの儀式」として羊や山羊を屠り、生贄とする。この巡礼明けの儀式は「イード・アル・アドハー」といい、メッカだけでなく各家庭でも行われるから、この日屠られる羊や山羊の数は数百万頭に上るといふ。

雲竹斎はイスラム教徒ではないから、メッカに行ってカーバ神殿を見たくてもできない。ここはイスラム教にとっては神聖な地だから、イスラム教徒以外の者は入ることも見ることも許されないからだ。当然、メッカや巡礼の様子など実際に見たわけではない。だからといって「～だといふ」とか「聞いた話では」という言葉を付けると、疑い深い友人たちは一切信用しなくなるから、自分が体験したことがない巡礼の話は、質問されればボロが出るといけないから、あまりしないことにしている。